

「優勝劣敗，適者生存」—— 進化論の 中国流布に寄与する日本漢語

陳 力 衛

1. はじめに

従来、翻訳史の視点から近代中国における西学東漸のルートとして次の三つが挙げられる。

- A. 在華外国人宣教師の翻訳
- B. 中国人自身の西洋語からの直接翻訳
- C. 中国人が日本語からの重訳

A. は、いわゆる明末に来華したマテオ・リッチ（利瑪竇）をはじめとした宣教師たちによる洋学の伝播である。直接西洋の原書からの翻訳もあれば、彼ら自身の身につけた西洋知識を中国語で表現することもある。前期のカトリック系の宣教師による『職方外紀』『西学凡』や後期のプロテスタント系の宣教師による『博物新編』『万国公法』などもこの類に属している。B. は中国清末における知識人の翻訳を指し、代表者として嚴復の名が挙げられる。そして C. は、まさしく日本経由の西洋知識がいかにして中国へ伝わるかの問題である。それも二つのルートに分けられる。一つは「西洋語→日本語→中国語」のように、たとえば『共産党宣言』の最初の中国語訳は「独→英→日→中」の転訳を経て成立されたもので、知の伝播という角度から見て、通時的にテキストの影響関係をたどりながら、西洋の思想や概念などが日本を通して中国に伝わった。もう一つは当然ながら、「日本語→中国語」のように日本人自身の執筆した文章から直接訳出されたもので、たとえば幸徳秋水の『二十世紀之帝国主義』が早くも 1903

年に中国語に翻訳された。

近代において、東アジアに位置しながらも、日本と中国の知識人が救国の方策を西洋に求めている点と同じである。そこでたとえば日本において、A. のような中国語で書かれた漢訳洋書でも日本の西洋知識の受容の媒体となりうるから、同一の外来概念に対して日本既存の蘭学由来の訳語に加えて、中国からの訳語も入ってくることになる。結果的に「民主(中)－共和(日)」「審判(中)－裁判(日)」,あるいは「電気(中)－^{エレキ}越曆(日)」「化学(中)－舍密(日)」のように、二つの訳語が同時に日本語に存在する一時期があり、後に意味の住み分けや訳語の交代があったりして、ようやく今日のように定着してくる。一方、こういう影響関係のある日中間の交流とは別に、時代が下って同一なる西洋語のテキストから、日中両国はそれぞれ独自の翻訳が出され、しかも相互に没交渉で参照関係も見られないという奇妙な現象が翻訳史に現れてくる。それが結果的に、中国においても、まず歴史的に A. と B. の翻訳から生まれた概念、用語のずれをいかに克服するかの問題がある。たとえば、同じ英語の unit に対して、A. は「単位」と訳し、B. は時代的に後でありながら、新たに音訳の「么匿」をもってそれに当てる。そして今度は B. の翻訳において、C. の日本経由の概念や用語とのせめぎあいも生じてくるのであった。

したがって、中国における近代概念の成立について考える際、中国独自の訳語 A. と B. において概念の継承と統一が課題の一つとして挙げられる。それから B. の翻訳では、同時代もしくは前の時代の C. のような日本語由来の概念をどのような態度で取捨選択するかが問題となってくる。本稿では、B. の翻訳の代表として近代中国における西洋思想の翻訳家である嚴復を取り上げながら、中国における進化論の流布に日本漢語がどのように寄与したかを、日中語言交流史の角度から見てみようとする。

2. 嚴復の翻訳とその訳語の行方

嚴復 (1854-1921) は、福建省の医者の家業とする一族に生まれ、若いときに、海軍の人材育成のために設けられた福州船政学堂に学び、西洋教育を受けた。そして1877年からイギリスのポーツマス海軍大学に留学し、広く西欧の文化、思想を吸収し、帰国後、1880年に李鴻章が天津に創設した北洋水師学堂に招かれて総教習となり、以後二十年間その職にあった。しかし1894年の日清戦争の敗北を体験後、新聞紙上に中国の政治や思想を批判し、変革を呼びかけ、啓蒙活動を本格的に開始する。1898年中国における最初の社会進化論の訳書『天演論』を出版し、一世を風靡した。西欧列強や明治日本によって滅亡の危機にさらされているという意識が濃厚だった時代だけに、康有為、梁啓超をはじめ、当時の中国知識人に与えた影響は非常に大きかった。

『天演論』の出版によって嚴復はその啓蒙思想家または翻訳家としての第一人者の地位を揺るぎないものにしていった。その後、表1のように、政治、経済、社会、論理の面で次々と訳書を出版し、「信・達・雅」という三位一体の翻訳理論を構築した¹⁾。1908年北京で学部審定名詞館の責任者となり、学術用語の統一に努めた。1912年辛亥革命のあと、京師大学堂から改名された北京大学の初代の学長となり、また約法会議議員として政治へ参加し、憲法案の起草に関わる。晩年は袁世凱の帝制復活運動への加担により弾劾され、失意のうち故郷福州で死去した。

以来百年近く、嚴復に関する研究がさまざまにあり、思想史や翻訳史からのアプローチだけでなく、歴史人物としての具体的な考証及び史料発現なども、あらたな領域を開いている。日本でも夥しい論文が発表され、21世紀に入って、著書だけを見ても、李暁東『近代中国の立憲構想 嚴復・

1) 「信」は直訳、「達」は意訳、「雅」は修辭という理解があるが、嚴復の訳は「雅」において目立つところがある。

表1 厳復訳と日本語訳の対照

原著者	原書名	厳復訳	日本語訳	備考
トーマス・ハックスレー	Evolution and ethics, 1894	『天演論』陝西味経書書処 (1895) 重刊	上野景福訳『進化と倫理』育生社 (1948)	
アダム・スミス	An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, 1776	『原富』(1901) 上海南洋公学訳書院	石川暎作訳『富国論』(1888)	
ハーバート・スペンサー	The Study of Sociology, 1873	『群学肄言』(1903) 上海文明編訳書局	大石正巳訳『社会学』(1883)	
ジョン・ステュアート・ミル	On liberty, 1859	『群己権界論』(1903) 上海商務印書館	中村正直訳『自由之理』(1872)	現在名『自由論』
エドワード・ジェンクス	A History of Politics, 1900	『社会通銓』上海商務印書館 (1904)	『政治史』ジェンクス川原次吉郎講述, 松本書房 (1928)	『政治史概説』エドワード・ジェンクス著, 松本書房 (1929)
ジョン・ステュアート・ミル	A System of Logic, 1843	『繆勒名学』(1903)	大関将一訳『論理学体系』春秋社 (1949年)	
モンテスキュー	L'esprit des lois, 1750	『法意』(1904-09) 商務印書館	何礼之訳『万法精理』(1875)	現在名『法の精神』
ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ	Primer of Logic, 1876	『名学浅説』(1908)	『論理学入門』	

楊度・梁啓超と明治啓蒙思想』(法政大学出版局, 2005)と區建英『自由と国民 厳復の模索』(東京大学出版会, 2009)があり, いずれも思想史からのアプローチが中心であった。さらに永田圭介の『厳復—富国強兵に挑んだ清末思想家』(東方選書, 2011)があり, 本書の帯に「中国の福沢諭吉」の文字が躍るように, 新しい視点をもって近代中国における厳復の意義およびその位置付けを再定義している。

上の表1から二つのことが見て取れる。一つは, 中国より日本のほうが先に翻訳が行われたことである。中村正直訳『自由之理』(1872), 何礼之訳『万法精理』(1875), 大石正巳訳『社会学』(1883), 石川暎作訳『富国

論』(1888)がいずれも19世紀後期に訳されたのに対して、中国のそれは全部20世紀に入ってからの翻訳である。逆に『天演論』『社会通銓』『繆勒名学』『名学浅説』の翻訳のように、日本より早くなる場合もある。これはむしろ両国の知識人の関心の作者・作品の違いによる翻訳の時代差であって、その分野全体における翻訳や受容の歴史を物語るものではない。第二に同一英文から訳された書名の違いから概念の翻訳の異同が日中両言語の訳書に見られる点である。両者の比較を通して、二つの民族が西洋の新しい流れに対応する際、どんな語句や文体で翻訳したのか、訳者の着眼点と翻訳の重点がどこに置かれていたのか、そこから文化背景の異同により、作品の選択に価値観の相違が見られるのか、あるいは日本の影響を受け入れつつその概念の時間差をどうやって克服するのかの問題も見えてくる。

じじつ、鈴木(1983)によれば、「名文家をもって自任もしていた嚴復は、初期の訳業においてはつとめて日本語の訳語を避け、自前の訳語をくふうしていった。しかしやがて、訳語の苦勞にたえかねてアダム＝スミスの『国富論』あたりから、やむなく時おり日本漢語も使用せざるをえなくなり、その傾向は、ミルの『論理学』や、モンテスキューの『法の精神』の全訳においていっそう顕著になってゆく」という²⁾。

したがって嚴復の中国語訳と比べて、同様に漢語多用の日本語の翻訳とどのような差異が生じてくるかが、問題の関連するところである。直接西洋語から訳された嚴復の訳語の独自性と留日学生が日本語からの重訳という冒頭のB.とC.の二つの流れが、近代中国のコンテキストにおいて互いに作用しあい、数十年のすり合わせを経てから、われわれにどんな結果をもたらしたのであろうか。この点について、同じ鈴木(1983)では、

中国においては、イギリス帰りの嚴復が、進化論を始め、ヨーロッパ近代の諸科学の代表的存在となるものを、自前の訳語をくふうして

2) 鈴木(1983)

次々と翻訳したのであったが、現在の中国では、嚴復苦心の訳語はそのおおむねが死語となり、かわって日本社会でくふうされた「新漢語」が、かえって一般に普及している。嚴復がせっかく苦心してくふうした翻訳語は、怒涛のようにおし寄せる日本漢語によって淘汰されてしまうという結果になった。

と日本からの影響を指摘している³⁾。

こういう問題をめぐって、さまざまな議論がありうるが、通常多くはなぜ嚴復の訳語が最終的に現代中国語にあまり残らず、日本からの訳語に勝てなかったのかの一点に帰してしまう。この問いに答えるため、すでに多くの先行研究があり、ここで黄克武(2007)のまとめた以下の五点をみておこう。

- (一) 清末以来日本語から訳出された書籍の数量が多くて、系統的な流れを成しているから、これらの書籍は出版界を独占的にしただけでなく、新語の上位概念から下位概念までの言語体系を一体化している。こうした日本の語彙に多くの使用者は抵抗しがたくなる。相対的にみれば、嚴復の訳著は市場において一部分しか占めておらず、同時に嚴復は積極的に新聞業界を利用することができず、影響力が限られている。
- (二) 嚴復の訳著は「先秦文体を模倣し雅のほうに務めて」いるから、読者に理解されにくい。よって、1910年代以降の白話文の運動後に人々に受け入れ難いものとなってくる。
- (三) 嚴復の翻訳には単音節語を好む(たとえば「計学、群学、心学」の例、又は「聯」をもって corporation と対訳、「貨」をもって commodity と対訳)から、「経済、社会、心理、法人、商品」のような「複合語」の持つ意義伝達上の豊かさに抗しきれない。
- (四) 嚴復は音訳を多用⁴⁾。

3) 同上

- (五) 厳復の統括している訳名統一の仕事も遅滞として有効に推行できずにいる。

こうみると、一番目の大きな原因として当時の日本語由来の新知識という書籍の流通量の状況と日本漢語の新概念がカバーする領域の問題を考慮せねばならぬ以外、その他、挙げられた四つの理由は全部厳復個人の問題である。二番目は本来厳復の長処であったはずだが、しかし時代に逆行するこの方向は中国語の文体的変化にはますます合わなくなった。三番目と四番目は具体的な訳語の特徴であり、訳し方において旧来のものを継承するよりは独創的なものが多い。これは前述のように、A. と B. とのギャップを克服していないことである。五番目も依然として日本語新語の激増と相関連しているだけでなく、かつまた厳復本人の新語に対する態度を反映しているのである。

3. 「天演」と「進化」—「進化論」流布における用語の日中混合

前述したように、中国における進化論の最初の訳著は厳復の『天演論』であって、それはトマス・ヘンリー・ハクスリーの『進化と倫理』から抄訳し、それに厳復自身のコメントを付したものである。ただ厳復のコメントはハクスリーとは意見を異にするハーバート・スペンサーの立場にたったものであり、ハクスリーに批判的な言辞が多く見られる⁵⁾。

日本において、むろんハクスリー（赫胥黎）の著作は多く翻訳されてい

- 4) 楊紅 (2012) の研究では『天演論』の訳語を下表に分類し、音訳語が意訳語の三倍だと示している。ただし「現在使用中」の欄に僅か二語だけ挙げたのは人名表記であり、その形態による判断の基準はやや主観的に傾ける感がある。

訳法	訳名類	数量	訳語例
意訳	意訳詞(造字)	38	進化, 名学, 生学 (生物学), 理財之学 (経済学), 愛力 (化学親和力)
音訳	音訳詞	119	歌白尼 (哥白尼); 斐利賓 (菲利賓)
	総計	157	
	現在使用中	35	歌白尼 (哥白尼); 斐利賓 (菲利賓)

- 5) 王道還 (2009) 「《天演論》原著文本及相關問題」『新史学』第三卷, 中華書局。

た。たとえば『生種原始論』(森重遠, 1879), 『科学入門』(普及舎, 1887), 『通俗進化論』(金港堂, 1887), 『進化原論』(丸善, 1889), 『生物学』(金港堂, 1890), 『進化論大意』(高等語学文庫第1編)(語学文庫刊行会, 1910)などがあるものの, 嚴復の『天演論』の依拠した底本が表1で示された通り, 訳出されたのは戦後の1948年であった。にもかかわらず, 日本語における進化論の概念及び訳語の成立は中国よりも早く, 基本的に明治10年代に確定されたものである。

鈴木修次の『日本漢語と中国』(中公新書, 1981)では, わざわざ<「進化論」の日本への流入と中国>なる一章を設けて, 進化論の日本における伝播と中国との関係を詳細に論じ, とくに日中両国が進化論を導入する過程において翻訳語の差異に注目している。李冬木(2013)は, その論文に取り上げた日中双方の進化論語彙を下記の表2のように纏めている。

表2 『日本漢語と中国』にみる訳語対照一覧

原 語	嚴復の訳語	日本の訳語	日本の訳語の出处
evolution	天演／進化	化醇, 進化, 開進 進化, 發達	哲学字彙 I, II 哲学字彙 III
theory of evolution		化醇論, 進化論	哲学字彙 I, II
evolutionism		進化主義, 進化論	哲学字彙 III
evolution theory		天演論進化論	動物進化論
struggle for existence	物競	競争 生存競争	哲学字彙 I 哲学字彙 II
selection		淘汰	哲学字彙 I
natural selection	天擇	自然淘汰	哲学字彙 I
artificial selection	人擇	人為淘汰	哲学字彙 I
survival of the fittest		適種生存(生) 適種生存(生), 優勝劣敗 適者生存(生), 優勝劣敗	哲学字彙 I 哲学字彙 II 哲学字彙 III

* 『哲学字彙』の初版は1881年, 再版は1885年, 三版は1912年。

この表から，以下の二点の特徴が挙げられる。一つは、『哲学字彙』初版(1881)では日本の進化論関係の訳語がほぼ出揃うということである。これは日本ではじめての人文社会科学を含めた総合術語辞典であり，当時進化論を鼓吹する人々にとっては，東京大学において西洋人の講義をいち早く日本語化するための「虎の巻」的な性格があったことと関連していると思われる⁶⁾。

もう一つは，厳復訳において「天演」と「進化」を用いて，ともに‘evolution’の訳語にあたったことである。時代的に見れば，厳復訳にある「進化」は日本語から来る可能性が大であるが，黄克武(2014)の研究によれば，「早くも1895年の厳復の文章の中にすでに「進化」という概念を使っていて，文明と教化の段階までに進歩したことを意味し，人類の物質的，組織的ならびに精神的な成果を含めている」という。そして、『天演論』の定本に「進化」が6か所あり，厳復が1895-1897年にわたってスペンサー(斯賓塞)，ハクスリー(赫胥黎)の著作を閲読，翻訳する時に造られた語彙であって，日本語から訳された新語とは無関係で，一種の「暗合」とされている。

日本においては，「進化論」は1877(明治10)年に東京大学で教職に就いたアメリカ人エドワード・モース(Edward Sylvester Morse, 愛徳華・莫斯, 1838-1925)の講義によってはじめて触れられた。日本語に「進化」という語が早くも『学藝志林』第14-17冊(東京大学法理文三学部編，日就社，1878)に現れていて，「創世地質進化三説ノ帰一」という。これはモースの授業と関連するかもしれない。そのすぐ後の『哲学字彙』(1881)に「進化」を収録することは，同一大学の井上哲次郎にとって，進化論の影響が早く浸透していることの表れと見てよからう。

6) 真田治子「明治初期洋書教科書の副読本としての『哲学字彙』—東京大学洋書教科書及びフェノロサ講義受講ノートとの比較(第321回日本近代語研究会，2015年2月28日)」

1883年にモース氏の日本語版『動物進化論』が出版され、「動物種族ハ同一元祖ヨリ変遷進化」とあるなど、「進化」の語がますます普及した。つづいてその他の翻訳作品にも頻出している。たとえばスペンサー著『道德之原理』（須原鉄二訳、1883）には「行為ノ進化ヲ論ズ」とあり、有賀長雄が『社会学』（巻1社会進化論、巻2宗教進化論、巻3族制進化論、東洋館、1884）を出版し、巻1～巻3のタイトルに全部「進化」を使用した。また時の東京大学法文理学部総理を務める加藤弘之（1836-1916）も1882年に『人權新説』を出版し、天賦人權論を棄てて、弱肉強食の社会進化論を主張しはじめ、日本が国家主義へむけての論陣を張った。『人權新説』（1882）に「進化」についての説明が次のように定義している。

抑進化とは蓋し動植物が生存競争と自然淘汰の作用により漸く進化するに随て漸く高等種類を生ずるの理を研究するものにして

そうした時代の流れを反映させて、その後日本で出版された次のような英和辞典などは、均しく『哲学字彙』（1881）の訳を採用し、官学（東京大学）の影響力を発揮させた。たとえば

『英和字彙〈再版〉』（1882）Evolution 進化

『学校用英和字典』（1885）evolution 進化

『漢英対照いろは辞典』（1888）ひらけすすむこと（世等が）、すすみゆく。進化。

Devel-opment; evolution, to develop.

一方、巖復の後の文章に、「天演」と「進化」が同一文章に使われることが多く、1913年の〈天演進化論〉（『巖復集』第二集309-319）に至っては、文章タイトルも両者を併用するようになった⁷⁾。

「進化」に対応する「退化」も19世紀末に使用され始め、明治時代の新

7) 当然ながら時代的に日本語からの影響が増えてきて、その文章にも「哲学、生物界、社会、細胞、有機、有機体、団体、自由婚姻、宗教、生理学、制限、義務」など多くの日本由来の新語が使われていた。

語として、英語 *degeneration* に対応している。たとえばワイツマン著『進化万物退化新説』（小川堂，1889）には「一生ノ間ニ多少ノ退化アリト」とあるように、対概念としての「退化」がタイトルにも本文にも使用されていた。

日本に遅れて数年，中国語の『時務報』（1897年1月13日）にも「退化」が現れてくる。「有退化于不善者，亦在胚胎於变化之中。」のように使われている。或いは『理科通証・動物篇・露鼠』（1909）にある「曠鼠視覺退化而移其機能使聽覺与嗅覺發達」という例もあり，上記の嚴復〈天演進化論〉（1912）にも「民種退化，漸喪本来」というのが用いられていた。

「天演」と「進化」はともに二十世紀初頭のもっとも輝かしい言葉として中国語に流行っていて，当時編集された代表的な英華辞典の収録状況から，それらの位置づけを窺うことができよう。

顔惠慶の『英華大辞典』（1908）に「進化」という語が三か所現れている。

① darwinism

The doctrine of Darwin, as regards especially the origin of species by natural selection, 達爾文之天演説，進化論，天然淘汰説

② Anamorphosis

The change of form throughout the species of a natural group of animals or plants, in the course of time, (生物) 漸進，進化

③ Cosmism

A philosophy of things which grounds itself on the doctrine of evolution, (哲) 宇宙論，宇宙進化哲学

最初の①には同一概念下の中目別々の訳「天演説，進化論」を並列し，②は生物の「進化」を示し，③は新しい哲学分野を表している。

もう一冊の英華字典『官話』（1916）には，もっと多くの英語に対応されていた。

Natural a. ~ elimination / 天演淘汰（新）

Selection n. Natural ～／天演淘汰 (新)

Advance v.t. to make progress／進化

Develop v.i. by evolution to a more perfect state／進化 (新)

Development n. ～ theory／進化論 (新)

Evolution n. same as evolve, v.i.／天演 (新)；進化 (新)

Evolve v.i. to a more perfect state／進化 (新)；進化天演 (部定)

Phylogeny n. 種族進化論, 系統護生

ここで目立っているのは、「進化天演」を一つ概念と見做し、しかも「部定」のマーカをつけて公認とされていることである。これはむしろ嚴復自身が学部の名詞審査会の責任者をつとめることと関係している。日本語と関連のある「進化」や「進化論」や中日混合の「天演淘汰」などは、ここではそれぞれ「新語」と見做されている。

すなわち、近代中国において「天演論」が流行った際、「物競天擇，民力，民智，民徳」など全く新しい概念術語をもって鼓吹したほか、実は日本語由来の言葉もその流れに拍車をかけるように使われていた。しかもこれらの表現は後に主導的な役割を果たすようになり、進化論の宣伝には欠かせない言葉となってきた。

4. 「優勝劣敗，適者生存」——時代のコピーとして

中国近代の思想啓蒙家である胡適 (1891-1962) は、自伝『四十自述』(1931)において、進化論思想から影響を受けた経緯を次のように記述していた。

「天演論」は出版後数年ならずして、全国を風靡し、とうとう中学生の読み物にまでなったが、この本を読んだ人の中で、ハックスレーの科学史上また思想上の貢献を、理解し得た人は極めて稀であった。彼等が理解し得たのは、「優勝劣敗」の公式が、国際政治上にもつ意義だけであった。我が国の度々の戦敗の後において、庚子，辛丑の大

恥辱（北清事変のこと）の後において、この「優勝劣敗、適者生存」の公式は、確かに一つの頂門の一針であり、無数の人々に一種の絶大な刺激を与えた。数年の中にかかる思想は、野火のように多くの若人の心と血の中に燃え広がっていった⁸⁾。

さらに『天演論』が出版されて間もないころ、小学教師たちもそれを教材とするところが多く、中学校の教師も往往にして「物競天擇、適者生存」をもって作文の題としたりする。「生存競争、優勝劣敗」の原理も莊俞編撰『蒙学初級修身教科書』（文明書局 1903 年版）のような啓蒙教材に編入され、「物競天擇」、「淘汰」、「争存」、「優勝劣汰」などは新聞や雑誌を賑わす熟語となり、しかも「孫競存」、「楊天擇」、「争存女子学堂」、「競化学堂」、「競存初等小学堂」など人名や学校名などに使われた⁹⁾。当の胡適本人も「適者生存」にちなんで「胡適之」と改名するほどの熱気ぶりであった。

そのためか、いまだに「優勝劣敗」「適者生存」といったことばが嚴復の手によって生まれたという認識は、多くの記述に見られる。しかしながら、実際に『天演論』を通していても、ただ *survival of the fittest*（物競天擇）の対訳しか見つからず、その他、たとえば「優勝劣敗、適種生存」などの語句は嚴復によって造りだされたものならず、逆にほかの力、即ち日本語からの表現を借りていた。アメリカ人学者（浦嘉瑁 James Reeve Pusey）もかつて「優勝劣敗」という語に対して、もしかしたら梁啓超が日本からそれを中国へ伝えたもので、嚴復自身の翻訳によるものではなかろうかと疑念を抱いている（China and Charles Darwin, Harvard University Press, 1983, p. 463）、これはおそらく上記の鈴木修次の研究に基づく判断であろう。あるいは先行研究の『中国の近代化と知識人—嚴復と西洋—』（B. J. シュウォルト著、平野健一郎訳、東京大学出版会、(1978)）にある、「しかし、

8) 『四十自述』、台北：中研院近史所、2015 年版、59 頁。日本語訳は高田 (1965) を参照した。

9) 皮後鋒『嚴復評伝』389 頁による。

皮肉なことに、かれが造った新語の大部分は、日本製の新語との生存闘争に敗れ、消え去ることになったのである。」という記述にヒントを得ていたのかもしれない。この点に対して、皮後鋒の『巖復評伝』(2006)では「これは史実にあわず、巖復が1898年6月にすでに「優勝劣敗」という語を使っていた。」と批判しているが¹⁰⁾、そこで原文(『保種餘義』、『巖復集』第86頁)を確かめてみると、

英達爾溫氏曰：「生物之初，官器至簡，然既托物以為養，則不能不爭；既爭，則優者勝而劣者敗，劣者之種遂滅，而優者之種以伝。」

のようにたしかに「優者勝而劣者敗」のような形で出ていて、意味的にはまったく「優勝劣敗」と同じだが、いわゆる四字熟語に集約していないも

のであった。逆の考え方では巖復がわざわざ日本由来の色を薄めて四字熟語の「優勝劣敗」を句へと拡張させて使っていたと考えられなくもない。

日本では早くも1882年に出版された加藤弘之の『人権新説』(穀山樓，1882)の扉頁に著者の手書体「優勝劣敗是天理矣」と印刷されている(図1参照)。その本において繰り返し同じことばが使われると同時に、「生存競争」「自然淘汰」も併せて同書に頻繁に登場する。

鄒振環『中国近代社会に影響する百冊の翻訳作品』(2008)によれば、1882年加藤弘之は『人権新説』を出



図1 加藤弘之『人権新説』扉頁

10) 第389頁脚注3

版し、社会進化論の立場から自由民権思想に対する批判を明確にし、民権思想家との論争を引き起こした。加藤が思うには、天賦人権論は本来まともな存在証拠あらず、学者の妄想から生まれたものである。自然科学の進化論をもって天賦人権論に駁斥し、動植物界の生存競争、自然淘汰などの進化現象は「優勝劣敗」の「永世不易の自然規律」であり「万物法中の一大定規」であると考えている。『人権新説』出版の二か月後、即ち1882年11月、『郵便報知新聞』、『東京横濱毎日新聞』、『朝野新聞』、『時事新報』、『東京経済雑誌』などは、立て続けに批判の社説と文章を載せ、やがて『人権新説駁論集』に纏められていく。1893年の氏の『強者の権利の競争』なる一書は、『人権新説』の第二章「権利ノ始生並ヒ進歩ヲ論ス」をさらに拡充させ、権利も優勝劣敗の競争により次第に増大したものであると考えるようになり、人類社会におけるすべての生存競争のうち、強者の権利のための競争は最も多くかつ激しいもので、しかもこの種の競争は権利の自由を増加させ、さらに人類社会の進歩と発展にも欠かさないものであるとする。このように「優勝劣敗」に問題の焦点をあてた論点が、当時の在日留学生の注意をひきつけたのも偶然ではない。よってその本は1901年に楊蔭杭によって『物競論』（つまり嚴復の訳語を使って）と訳され、まずは5月27日の『訳書彙編』第四期、7月14日の第五期そして10月13日の第八期に連載されたのち、訳書彙編社より単行本として出版された。売れ行きが頗る良く、1902年7月に上海作新訳書局にて再版、1903年1月にさらに作新社図書局から第三版が出版された¹¹⁾。なお、『人権新説』も1903年に陳尚素による中国語訳が訳書彙編社から出版された。加藤の著作の中国語訳には、その用語が基本的にそのまま中国語として利用されている。

こういう時代背景からみれば、本来は生物が生存競争の中で、競争力の強い者は勝ち、以って生存することができる。対して競争力の弱い者は失

11) 鄒振環：『影響中国近代社會的一百種譯作』江蘇教育出版社，2008年3月

敗し、淘汰される。これはダーウィニズムの基本的論点であったが、加藤が後に間違っって人類社会に応用してきたといえよう。日本の自由民権運動の指導者植木枝盛は『天賦人權弁』(1883)第五章において、

人間社会ノ運行ハ単ニ優勝劣敗トノミ云ヒテ言ヒ尽ス可キニ非ラスと、加藤の説に反駁した。

中国語において、梁啓超はたしかに、1898年以後「優勝劣敗」も「進化」も使用し始めた。『清議報』第1冊，光緒二十四年十一月十一日(1898年12月23日)にすでにこの表現を使用している。

憑優勝劣敗之公理。劣種之人。必為優種者所吞噬所駭削。

或曰：如子之言則自五胡北魏遼金元以來，遊牧之種狎主中夏，而蒙古之兵力東轄高麗，北統俄羅斯，西侵歐洲，南吞緬甸越南，迫印度阿剌伯回回之種，撫有希臘羅馬西班牙印度之地，峨特狄打牲之種亦曾蹂躪半歐，然則優勝劣敗之說未可憑，而子所憂者特過慮耳。(〈續變法通議〉「論變法必自平滿漢之界始」)

しかし『清議報』にある19箇所の使用例を詳細にみると、その半分は日本語文から訳されたもので、実際に『清議報』第14冊(光緒二十五年四月一日1899)に掲載された望月鶯溪の〈対東政策〉なる一文の冒頭にいきなり「優勝劣敗，適種生存，此列国興亡之大公例也」となっていた。しかもその割注として「即天演論物競天擇之說也」と、嚴復の用語をもって解釈しているのがわかる。このような割注は一種の日中対訳としてみることができ、『清議報』ではよくこの種の対訳をもって日本語の「漢語」を解釈したため、故に時々その表現が日本的かどうかを判断する物差しともなっている¹²⁾。

黄克武(2013)にも引かれたように、1899年9月梁啓超は『清議報』第

12) 李運博『中日近代辞彙的交流：梁啓超的作用與影響』(南開大学出版社，2006)を参照。

30 冊に〈放棄自由之罪〉なる一文を撰し、「物競天擇，優勝劣敗，此天演学之公例也」を書いた時，同じくその直後に割注を加え，「此二語群学之通語，嚴侯官訳為物競天擇，適者生存，日本訳為生存競争，優勝劣敗。今合両者併用之，即欲定以為名詞（此の二語は社会学の用語であり，嚴復はそれを「物競天擇，適者生存」と訳し，日本は「生存競争，優勝劣敗」と訳す。今はその両者を合併して用い，即ち名詞として定めようと欲す）」と，中国の言い方と日本の言い方の融合をはっきりと言い表している。ただし，ここでは「適者生存」を嚴復の訳としたが，実際に上記のように日本で造られたものである。

『清議報』第 30 冊（1899 年 9 月）の中には日本で流行した政治小説『佳人之奇遇』から訳された例もある。

聲言曰。優勝劣敗者。天之数也。（原書は「聲言シテ曰ク優勝劣敗ハ天数ナリ」）

このようにみれば，中日混合の表現は梁啓超の手によるものかもしれない，後の文章にも彼は時々嚴復の「物競天擇」を使っている。たとえば『新民説』第六節（1902）にいわく，

循物競天擇之公例，則人與人不能不衝突，国與国不能不衝突。とあり，あるいは両者を並列し，『近世文明初祖倍根笛卡兒之学説・緒言』（1902）において，

物競天擇，優勝劣敗；苟不自新，何以獲存……故撮録其学説之精華以供考鑒焉。

と，同じく嚴復の「物競天擇」とともに，日本語の「優勝劣敗」も類義語として並べられている。

康有為『大同書』丁部にもこれを「天演論」と並列し，

就優勝劣敗天演之理論之，則我中国之南，舊為參苗之地，而為我黄帝種神明之裔所辟除。

と進化論をもって中国の人種論を展開している。

巖復自身の翻訳の中で、ようやく「優勝劣敗」を使い出したのは『社会通詮』(1904)である。

中西政教之各立，蓋自炎黄堯舜以来，其為道莫有同者，舟車大通，種族相見，優勝劣敗之公例，無所逃於天地之間。乃日論膚襲之士，動不揣其本原，而徒欲模仿其末節。曰是西国之所以富強也，庸有当乎！このような論説文の外に，清末の小説にもこういった表現が見られるようになり，まるで時代の特徴を反映させる流行語のような様相を呈している。小説『女媧石』には，

登此二十世紀活潑之舞臺，見此優勝劣敗之結果，欲解決此獨一無二之問題，下一個圓滿無缺之定義曰：國民教育，個人教育而已。

また『痛史』(1903) 第一回にも，

既有了国度，就有競争。優勝劣敗，取乱侮亡，自不必説。

とあり，時代を印象付けるには「競争」や「優勝劣敗」など，十分なキーワードが突出している。

一方，「適者生存」というのはおそらく「適種生存」から変えられたものであろう。前記の表2で示されたように，『哲学字彙』初版では(生物学)の専門用語として「適種生存」と訳し，再版では「優勝劣敗」を加えただけである。第三版になってようやく「適者生存」と直されたのであるが，実際の使用において，早くもダーウィンの『生物始源：一名種源論』(経済雑誌社，1896)出版以前に，下記の使用が認められた。

森笹吉著『文明の目的』(1888)に「適者生存」が多用され，その他，久津見息忠著『耶蘇教衝突論』(中外堂，1893)第二節や新家元郎著『自由党名士遊説遺響』(倉田藤四郎，1893)にも使われている。小倉孝治編『新編博物初歩』(金港堂，1896)では，「動物ニ係ル事柄第九章 動物ノ適者生存」と動物界に使われていて，そして程度副詞の「最」の連用修飾を加えて，たとえば『生物始源：一名種源論』(経済雑誌社，1896)の第四章の題目はずばり「自然淘汰即ち最適者生存」と，「自然淘汰」とイコールの意

味概念になっている。

語構成からみれば，確かに「優勝劣敗」と「物競天擇」はともに主述結構であるため，文へと発展する可能性がある。しかも「優勝劣敗，適者生存，自然淘汰，人為淘汰，生存競争」など，四字熟語が目立って，中国人にとって慣れやすいものである。故に日本語由来といえども，使い始めてからその語に対して疑義を抱くものはいなかったどころか，中国語表現だと思いつく人も多い。同様に，「適者生存」も主述結構で，この種の敘述的結構がセンテンスの短縮とも見ることができる。後に現れてきた「生存競争」「自然淘汰」と併せて，中国における進化論流布の欠かせない言葉となっている。

5. 「生存競争」「自然淘汰」と「弱肉強食」

「生存競争」「自然淘汰」の二語も最初加藤弘之の『人権新説』に現れてくる。両者の並列使用が多く，また「適者生存」と同一文章に共起することが多い。たとえば著者はまず「動植物ノ進化」の過程に「自然淘汰」と「人工淘汰」の二種類があることを挙げ，動植物はこの二種の作用によって「優劣ノ等差」が生じ，然る後に成長して互いに競争し合い，優者が劣者に勝って独自の生存を獲得することは，すなわち「是レ永世不易ノ自然規律ニシテ即万物法ノ一大定規」とされている。故にこれを「優勝劣敗ノ定規」と定め，「而テ其結果タルヤ常ニ必ス優勝劣敗ノ定規ニ合セサルモノハ絶テアラサルナリ」と断言する。続いてさらに「生存競争自然淘汰ノ理」を強調していく。

ダーウィンの『生物始源：一名種源論』（経済雑誌社，1896）の中でも，この一対の語を常に一緒に扱っている。たとえば「生存競争と自然淘汰との関係」を論じたり，または上記のように「自然淘汰即ち最適者生存」を言ったりする。のちの飯塚啓著『植物学新論』（帝国百科全書，第72編，博文館，1901）には「適者生存，生存競争」とともに，「自然淘汰」をくわえ

て、類義的意義の場を構成していく。

加藤弘之の『道徳法律進化の理』(博文館, 1900)では『人権新説』の主張以来、いつもながらこの概念を社会科学に用いている。

優劣両階級の間にかかる自利競争即ち権力競争及び其自然淘汰の必然結果

さらにほかの例を見ると、岩崎重参著『進化論者ダーキン』(洛陽堂, 1920)第六章の題目は「自然淘汰適者生存」となっており、有賀長雄著『社会進化論』(牧野書房, 1887)第四章にも、

社会発生の相互要素即ち生存競争の理に依て協力分勞する人類の聚合の起る次第。

と言っている。

当然ながら、「自然淘汰」の対象も自然界から人類社会へと拡大していくことになる。たとえば十時弥著『社会学撮要』(普及舎, 1902)では、わざわざ「社会における自然淘汰」なる一章を設けており、次第に宗教、思想、金融をふくめてこの用語で表述できるようになった。

日本語に用いられる「人為淘汰」と「自然淘汰」の表現は、中国語に入ると「天然淘汰」をもって後者を言い表している。

ほかに「弱肉強食」という語もあり、これは原来中国古典の韓愈〈送浮屠文暢師序〉にある「弱之肉、強之食。」という表現にその意味が使われていて、明代になってから劉基の〈秦女休行〉にも「有生不幸遭亂世、弱肉強食官無誅。」とある。近代になって弱者が強者によって辱められたり、弱国が強国によって侵略されたりする意味になっていく。これも上述の幾つかの表現とよく共起し、一種の類義概念をなしている。『朝日新聞』には、1885年以降絶えずこの語が出現し、1886年1月29日の社論〈交際論〉にも「優勝劣敗」と同一文に共起し、曰く、

弱肉強食一日安寧なかるべくして優勝劣敗の世の中となるべしとある。豊崎善之介著『社会主義批評』(警醒社, 1906)に「競争は弱肉強

食にあらず自然界の微妙」など、19世紀末から20世紀初頭にかけてこの語は頻繁に使用されたが、むろん「帝国主義」という概念につられて多用している感もあろう¹³⁾。

近代になってから中国語の文章では、在日の留学生陳天華の『猛回頭』(1903)には、

今日的世界，什麼世界？是弱肉強食的世界。

とあり、または康有為『大同書』乙部第二章にも、

其強大國之侵吞小邦，弱肉強食，勢之自然，非公理所能及也。

とあるのはみな日本語での使用に伴って増えてきた用法であろう。

つまり、もし単純に時代に沿って日中両国の使用頻度を調べるならば、近代において逆に日本語の使用が多く、それに刺激されて日本語から中国語へと逆輸入された語が多かろう。「弱肉強食」はその一例にすぎない。

以上に取り上げた各語は実際に下記の英華字典『官話』(1916)にも収録されていて、当時の基本的概念とみてよかろう。

Survival n. ~ of the fittest/優勝劣敗，適者生存，優存劣亡(部定)

Darwinism n. 自然淘汰(新) 適者生存(新) 優勝劣敗

Fit a. (5) Survival of the ~ test/優存劣亡(部定)；優勝劣敗(新)

Strong a. (1) Strong devour the weak, the/弱肉強食

したがって、何の標記もつけない「弱肉強食」を当時の中国語、または違和感のない語とみなされる以外、日本語から伝わってきたものとして「優勝劣敗(新)，適者生存(新)，自然淘汰(新)」を一概に新語とみなしている。そしてわざと「優勝劣敗」に模して造られた「優存劣亡」をもって「部定」と認定しているところからみれば、学部審定名詞委員会に關する厳復は、日本語由来の訳とは距離を保ちつつ気にしていることがわかるだろう。

13) 陳力衛〈‘帝国主義’ 考源〉『東亞觀念史集刊』第三期，2012年12月

6. おわりに

以上のように、中国における進化論の流布には、嚴復の功績が大であることはもちろんのこと、日本語の進化論用語がかなり寄与したことがわかる。とくに加藤弘之の「優勝劣敗是天理矣」というフレーズが声高に唱えられるようになってから、「優勝劣敗」を「天理、定規、公式、公例」と決め付け、有無を言わせぬ時代の雰囲気醸し出したことで、進化論思想が推し進められてきた。こうして、近代知の伝播の角度からみても、嚴復の翻訳はその独自の歴史的地位を占める一方、日本からの影響も無視することができない。鈴木(1983)に指摘されるように、実は嚴復の訳語に対して現代中国では日本語訳を使っているのが多い。

嚴復の翻訳は、用語の点からいって、中国においてもいまや古典になってしまった。民国十九年(一九三〇、昭和五年にあたる)、上海の商務印書館から発刊された「嚴訳名著叢刊」は、上掲の八種をすべて収めているが、巻末に「訳名表」の注記をつけ、嚴復の訳語と原語とを対比させるとともに、しばしば現代の中国社会ではこれこれのいい方をするのが普通であるという注記を施した。その注記を見ると、日本社会の用語と合致するものがきわめて多い。そうした現象を見ることによって、注記に示された現代中国社会の一般的いかたのうち、日本語と合致するものは、日本漢語が流出して中国に定着したのではないかという予想がたてられ、……

つまり、嚴復の翻訳理論「信・達・雅」のうち、その「雅」の物差しは日本語由来の訳語を意識するところがあるから、本来日本語訳語を排斥しようとするものであって、20世紀初頭における中国知識人の日本語由来の漢語に抵抗する理論的支えともなっていた。そこで、この抵抗意識が一番強く盛んな時代に、なぜ、同じ日本由来の「優勝劣敗」をはじめとした四字熟語は逆に何の妨げもなく順調に中国語の世界に入りこみ、しかも繰

り返し使用されるようになったのかが考えるべき問題のひとつである。言い換えれば、排斥すべき日本語訳語と、受け入れてもよい日本語訳語とは構造上・意味上においてどんな違いがあるのを分析する必要がある。そして厳復の訳語の独自性はどこまで堅持されてきたのか、彼の訳語は中国語社会においてどこまで影響を及ぼしたのか、または利用されたのかを、20世紀前半を中心に年代を追って探求しなければならない課題とすべきであろう。

参考文献

- 山下重一「ミル『自由論』の日本と中国における初訳—中村敬字訳『自由之理』と厳復訳『群個権界論』」『英学史研究』33, 日本英学史学会, 2000年
- 山下重一「中国におけるミル『自由論』の受容—厳復訳『群個権界論』(1903)(上)(下)」『国学院法学』38巻1, 2号, 2000年
- 山下重一「中村敬字訳『自由之理』—ミル『自由論』の本邦初訳(一) - (三)」『国学院法学』47巻4号, 48巻1号, 48巻2号, 2010年
- 王杖主編『厳復集』中華書局, 1986年1月
- 王憲明『語言, 翻訳與政治—厳復訳『社会通詮』研究』北京大学出版社, 2005年5月
- 平野健一郎訳『中国の近代化と知識人—厳復と西洋—』B. J. シュウォルト著, 東京大学出版会, 1978年
- 石井研堂「精神学科の訳語」『増補改訂明治事物起源』下巻, 春陽堂書店, 1944年11月, 519-521
- 石田雄「J・S・ミル『自由論』と中村敬字および厳復—比較思想的試論」『日本近代思想史における法と政治』岩波書店, 1976年
- 皮後鋒『厳復評伝』南京大学出版社, 2006年8月
- 永田圭介『厳復—富国強兵に挑んだ清末思想家』(東方選書) 2011年7月
- 米川明彦「近代語彙考証6—進化論」『日本語学』2-9, 明治書院, 1983年9月, 114-117頁
- 李冬木「「天演」から「進化」へ—魯迅の進化論の受容とその展開を中心」『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』(石川禎浩・狭間直樹編) 京都大学人文科学研究所, 2013年1月
- 沈国威「清末民初中国社会対‘新名詞’之反応」『アジア文化交流研究』第2号,

- 関西大学アジア文化交流研究センター, 2007年3月
- 沈国威『「官话」(1916)及其訳詞:以「新詞」「部定詞」为中心』『アジア文化交流研究』第3号, 関西大学アジア文化交流研究センター, 2008年3月
- 沈国威『近代中日辞彙交流研究』北京:中華書局, 2010年
- 沈国威『嚴復與訳詞:科学』『翻訳史研究』第一輯, 復旦大学出版社, 2011年6月
- 徐水生「翻訳の造語:嚴復と西周の比較—哲学用語を中心に—」『北東アジア研究』第17号, 島根県立大学北東アジア地域研究センター, 2009年3月
- 馬勇『嚴復學術思想評伝』北京圖書館出版社, 2001年2月
- 高田淳「嚴復の「天演論」の思想—普遍主義への試み—」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』20号, 1965年11月
- 高柳信夫「中村正直と嚴復におけるJ・S・ミル『自由論』翻訳の意味」『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』(石川禎浩・狭間直樹編) 京都大学人文科学研究所, 2013年1月
- 桑兵「清季変政與日本」『江漢論壇』2012年5期, 5—16頁
- 陳継東「在中国發現武士道——梁啓超的嘗試」『台灣東亜文明研究學刊』第7卷第2期, 2010年12月, 219—254頁。
- 黃興濤「新名詞的政治文化史」『新史學』第3卷, 中華書局, 2009年12月
- 黃克武『自由的所以然—嚴復對約翰彌爾自由思想的認識與批判』允晨文化, 1998年
- 黃克武「新名詞之戰:清末嚴復譯語與和製漢語的競賽」『中央研究院近代史研究所集刊』第62期, 2008年12月
- 黃克武「何謂天演? 嚴復「天演之學」的內涵與意義」『中央研究院近代史研究所集刊』第85期, 2014年9月
- 鈴木修次「<進化論>の日本への流入と中国」『日本漢語と中国—漢字文化圏の近代化』, 中央公論社, 1981年9月
- 鈴木修次「嚴復の訳語と日本の「新漢語」」『国語学』第132集, 1983年3月
- 樺島忠雄・飛田良文・米川明彦『明治大正新語俗語辞典』東京堂出版, 1984年5月
- 惣郷正明・飛田良文『明治のことば辞典』, 東京堂出版, 1986年12月
- 楊紅「從『天演論』看嚴復的訳名思想」『蘭州交通大学學報』第31卷第5期, 2012年10月
- 蘇中立, 塗光久主編『百年嚴復—嚴復研究資料精選』福建人民出版社, 2011年1月
- 羅志田「抵制東瀛文体:清季圍繞語言文字的思想論争」『歷史研究』2001年6月

「優勝劣敗，適者生存」——進化論の中国流布に寄与する日本漢語

James Reeve Pusey 「China and Charles Darwin」, Harvard University Press, 1983

附記：本稿は平成27年度成城大学特別研究助成（研究課題「日中言語文化交渉史に関する研究」）による研究成果の一部である。